

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：36101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350949

研究課題名(和文) 養育者の幸福感と省察が親育ちに与える影響

研究課題名(英文) Impact of caregiver's happiness and reflection on parent's growth

研究代表者

加藤 孝士 (KATO, takashi)

四国大学・生活科学部・講師

研究者番号：10631723

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本申請研究は、質問紙調査を用い養育者の内的作業モデル(自己観・他者観)と幸福感、省察の関係、および、それらが親としての変化に与える影響を検討した。その結果、自己観が低く幸福感が高い場合、省察を高めることが示された。また、自己観と他者観がポジティブな場合、省察をすることが親としての成長を促進させることが示された。

加えて、ウェブ調査を行い、内的作業モデル、省察、幸福感が育児感情に与える影響を検討した。その結果、幸福感、省察の高さが育児へのポジティブな感情を高めること、ポジティブな他者観が育児のネガティブな感情を低くすることが示された。

研究成果の概要(英文)：This questionnaire study examined the relationships between the internal working model (anxiety/avoidance), subjective well-being, and reflection, and the influence of those relationships on the participants' change as a parent. The results indicated that when subjective well-being was high and anxiety was low, it was shown to increase reflection; and when anxiety and avoidance were positive, it was shown that reflection increased their growth as parents. Further, web-based surveys were used to examine the influence of the internal working model, subjective well-being, and reflection on childcare-related emotions. The results indicated that high subjective well-being and reflection increased positive feelings regarding childcare, while positive avoidance lowered negative feelings toward childcare.

研究分野：発達心理学

キーワード：親育ち 内的作業モデル 幸福感 省察 育児感情

1. 研究開始当初の背景

核家族化, 少子化, 晩婚化など, 近年の子育てを取り巻く様々な問題が指摘されている。そこで, 子どもの発達を支えるとともに, 養育者の育児ストレスを軽減するための支援の在り方が検討され続けている (佐藤・菅原ら, 1994 など)。しかしながら, 日常生活においてストレスは常に感じるものである。よって, 育児ストレスを軽減するという視点に加え, ポジティブな心理を高める要因を検討することも求められる。

このような視点から, 養育者の幸福感を高めるための子育て支援の可能性も指摘されている (加藤, 2008 ; 2012 など)。また, 虐待の世代間伝達の要因とされている内的作業モデル (以下: IWM) が, 配偶者や実母などからのサポートが可能となれば, 子育てによってポジティブに変化するとの結果も導き出されている (加藤, 2007)。このように, 子育て期のポジティブな側面に注目した研究や, 子育てによる成長を示す研究は, 近年登場してきた「親育ち支援」にもつながる考えであり, この視点は今後さらに求められる。

親としての成長について取り上げた, 朴 (2009) は, 養育者の省察の重要性について述べている。省察とは, 自らの認知を理解すること指し, 自身, 子ども, 他の親や子どもに関する情報という側面からの振り返りを意味している。そして, 朴 (2006) は, 自らの養育を振り返ることで, 育児行動や育児ストレスに影響を与えることを示している。このように, 養育時の省察は, 親として, 人として成長を導き, 子育てをより充実したものにする可能性を秘めている。

加藤 (2007) においても, IWM の更新に関して自らの被養育経験の再考が重要な要因となったことを示唆するとともに, 幸福感の活性化により, 被養育経験の再考を促進した可能性を指摘している。すなわち, 幸福感に注目し, 省察, 養育行動との関係を検討していくことは, 親の変化に与えるメカニズムの一端を示すことが出来る。

そこで, 養育者の「IWM」と「幸福感」, 「省察」の関係を検討し, 養育者が本来備えている認知的特性と, 「幸福感」によって, どの程度「省察」が促進されるのか否かを検討する必要がある。また, 「省察」が「親としての成長 (変化)」に影響を与えるのか検討を重ねていく必要がある。

2. 研究の目的

研究の背景を含め, 本研究では以下の4点を目的とした。(1)「親としての成長 (変化)」の指標を作成する。(2)養育者の「IWM」, 「幸福感」, 「省察」の関係を明らかにする。(3)「幸福感」, 「省察」の関係が, 「親としての成長 (変化)」にどのように作用しているのかを明らかにする。(4)ウェブ調査を用い, 全国的な傾向を明らかにする。

3. 研究の方法

【予備調査】

予備調査では, 「親としての成長 (変化)」の指標を作成するため, 養育経験のある母親31名を対象とした自由記述式の調査を行った。手続きとして, まず, 養育者へのインタビュー調査を30分程度行い, その後, 自由記述での回答を求めた。インタビューは, 子育てをする楽しさや大変なことについて尋ね, 日常の子育てについてのイメージをより具体化することに努めた。具体的な質問項目は, 「1. 親になって, 変化したと感ずることはどんなことですか?」「2. その変化に何が影響していると感じますか?」という2つの質問項目を設定した。1で回答した項目ごとに, どのような要因が影響していたと考えるか回答を求めた。

【研究】

四国地区で乳幼児を養育中の母親225名 (24歳以下: 6名, 25歳~29歳: 14名, 30歳~34歳: 66名, 35歳~39歳: 81名, 40歳~44歳: 49名, 45歳以上: 9名) を対象とし, 質問紙調査を行った。調査は, 幼稚園, 保育園にお願いし, 質問紙を配布し, 各園の回収ポストに投函を求めた。調査用紙は, 事前に調査協力園の園長先生に確認し, 承認を受けたのち, 学内倫理審査会の審査を経たものを使用した。

調査内容は, 予備調査の自由記述をもとに項目を作成した「自己意識尺度 (親としての成長の指標)」に加え, 先行研究で用いられた既存の尺度である「子育ての省察尺度 (朴・杉村, 2009)」「ECRの修正版 (加藤, 2007)」「主観的幸福感尺度 (伊藤ら, 2003)」の4つの尺度を使用した。自己意識については, 現在の意識に加え, 出産前の意識も想起し, 回答を求めた。加えて出産後の変化について自由記述で回答を求めた。

【研究】

研究の結果を基に, ウェブ調査を行った。調査対象者は, 乳幼児を養育中の母親800名 (24歳以下: 16名, 25歳~29歳: 99名, 30歳~34歳: 281名, 35歳~39歳: 256名, 40歳~44歳: 148名) であった。ウェブ調査は, 株式会社マーシュの調査協力者に依頼し, 回答を求めた。

調査内容は, 「子育ての省察尺度 (朴・杉村, 2009)」「RQ尺度 (中尾・加藤, 2004)」「主観的幸福感尺度 (伊藤ら, 2003)」「ソーシャル・サポート尺度 (加藤, 2007)」「育児不安尺度短縮版 (加藤ら, 2002)」「育児感情尺度」の6つの尺度を使用した。

本研究の分析には, 質的データの分析には, KH Coder (Ver, 3.8) を, 量的データについては SPSS (Ver, 22.0), HAD (Ver, 15.0) を用いた。

ここでは, 主要な結果のみ報告する。

4. 研究成果

【予備調査】

得られた自由記述の形態素解析 (文章や単

語を切り分ける処理)は茶筌(ChaSen〔8〕)を使用した。まず、31名、111の自由記述データを分析対象ファイルとして前処理を行った。文章の単純集計の結果、377の文が確認された。また、総抽出語は3921であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、1566の語を分析対象とした。次に茶筌を利用し、複合語の検出を行い、最終的には出現数5回以上の40語を最終的な分析対象とした。

母親の自由記述について出現パターンの似通った組み合わせを抽出するため、階層クラスタ分析(最少出現5,方法:ward法,距離:Jaccard)を行った(図1)。

その結果、6つのクラスターに分類された。第1クラスターは“食への関心”,第2クラスターは“自己制御”,第3クラスターは“視野の広がり”,第4クラスターは“多面的な捉え方”,第5クラスターは“親としての責任感”,第6クラスターは“子育て環境”と命名した(詳細:雑誌論文3)。

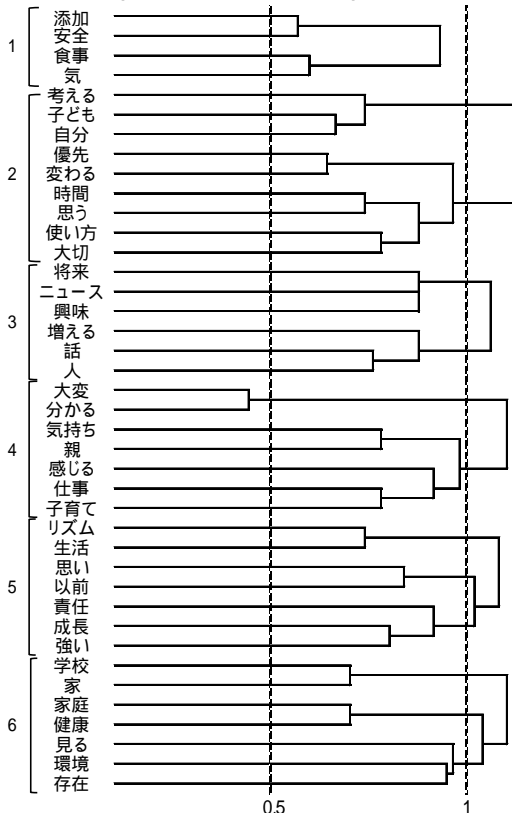


図1 階層クラスタ分析の結果

【研究】

「親としての成長(変化)」の指標として、自己意識に関する尺度を作成することを第一の目的とした。また、「IWM」、「幸福感」、「省察」の関係を明らかにすること、それらが「親としての成長」に与える影響を検討することを第二の目的とした。

(1)「親としての成長」の指標

先行研究で親としての育ち・成長・変化に関する質問紙調査の項目に加え、予備調査で得られた各クラスターから抽出した自由記述の項目を追加した。その後、養育者に出産前と現在の意識についての意識について回答を求めた。

まず、出産前と現在(子育て中)の自己意識得点を基に、それぞれ因子分析を行った(共に、主因子法、プロマックス回転)。固有値の推移から因子数を検討し、両調査とも3因子構造が妥当と判断した。その後、負荷量が.35以上であることを採用基準とし、加えて2つ以上の因子に負荷量が.35を超える項目も除外し分析を続けた。その結果、出産前は「.将来への展望(=.77)」「.自分視点(=.70)」「.他者視点(=.72)」現在は「.計画性(=.77)」「.広い視野(=.75)」「.心の広さ(=.69)」という異なる因子構造であることが確認された(現在の結果のみ表1に示す)。

表1 現在の自己意識に関する因子分析(主因子法,プロマックス)

	前の因子		
計画性(=.77)			
健康を考え、食事を作る	.730	.088	-.071
時間の使い方を考える	.710	-.096	-.058
規則正しい生活を心がける	.706	.014	-.064
計画的にお金を使う	.565	-.076	.143
目標に向かって頑張る	.477	-.037	.234
物事に積極的に取り組む	.425	-.016	.348
広い視野(=.75)			
環境問題(大気汚染・食品公害)へ関心がある	.066	.736	-.081
伝統や文化は大切だと思う	-.175	.654	.031
日本や世界の将来について関心がある	-.030	.542	.153
児童福祉や教育問題への関心がある	.180	.497	-.081
食事につかう食品の産地、原材料を気にする	.288	.490	-.158
常識やしきたりを考える	-.041	.463	.074
他人の迷惑にならないように心掛ける	-.098	.367	.189
心の広さ(=.69)			
他人に対して寛大である	-.162	.167	.664
柔軟な考え方をする	.054	-.002	.651
小さいことにくよくよしない	.077	-.130	.585
自分本位の考えをしない	.099	.187	.431
		.516	.268
			.246

続いて自由記述の使用語数をカウントしたところ、「子ども(108回)」「自分(73回)」「思う(49回)」「考える(44回)」の順となった。具体的な記述としては、「自分が一番大切だと思っていたが、今は子どもが一番大切だと思う。また、他人の親も同じように子どもが大切と思っているのだと思うと、他人の親の気持ちも何となく考えようとするようになった。(40歳以上)」といった文章のように、子どもを中心とした視点へと変化していた。因子分析の結果からも、「自分-他者」といった自分の内外を基準にした因子構成から、「広い視野」や「心の広さ」といった広がり因子構成となっており、自己意識からより広い視点への基軸へ変化したと捉えることが出来る。

次に、属性の影響を検討するため、「子どもの数」「長子の年齢」「親の年齢」をそれぞれ分類し、各下位因子得点を比較した。その結果、すべての因子で有意な主効果は確認されなかったため、属性からの影響を想定せず、その後の分析を行うこととした(詳細:学会発表3,10,11)。

(2) IWMと幸福感が省察に与える影響

ここでは、「省察」の各因子を目的変数とし、説明変数として「IWM」の下位因子得点と「幸福感」得点をStep1に、それらの交互作用項をStep2,Step3に投入した階層的重回帰分析を行った(ここでは有意影響が確認

された中から、主要な結果のみ報告する。

「子育て内省」を目的変数とし、説明変数としてstep1に「自己観」と「幸福感」を投入し、step2に「自己観」と「幸福感」の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った。その結果、step2に有意な増分が確認され ($R^2=.03, p<.01$)、「自己観」と「幸福感」の交互作用項も有意であったため ($\beta=.51, p<.01$)、単純傾斜検定を行った。

具体的な手続きとしては、「幸福感」を調整変数とみなし、その値を平均 $\pm 1SD$ の2通りで固定した場合のストレスの効果を検討した(図2)。その結果、幸福感が相対的に低い場合(-1SD)においては、「自己観」と「子育て内省」に正の関係が確認され ($\beta=.34, p<.01$)、幸福感が相対的に高い場合(+1SD)においては「自己観」と「子育て内省」の関係が確認されなかった ($\beta=-.05, n.s.$)。よって、幸福感が相対的に低い母親は、自己観がネガティブなほど、子育ての内省を多く行うことが示された。

また、「自己観」を調整変数とみなし、その値を平均 $\pm 1SD$ の2通りで固定した場合のストレスの効果を検討した。その結果、「自己観」が相対的に低い場合(-1SD)においては、「幸福感」と「子ども内省」に正の関係が確認され ($\beta=.70, p<.01$)、「自己観」が相対的に高い場合(+1SD)においては「自己観」と「子育て内省」の関係が確認されなかった ($\beta=-.13, n.s.$)。よって、自己観が相対的に低い場合は、幸福感がポジティブな場合は、省察を多く行うことが示された。

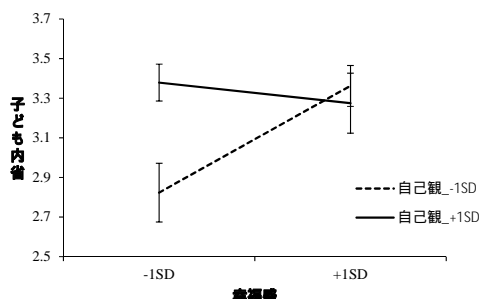


図2 自己観と幸福感の交互作用

「子ども考察」を目的変数とし、説明変数としてstep1に「自己観」と「幸福感」を投入し、step2に「自己観」と「幸福感」の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った。その結果、step2に有意な増分が確認され ($R^2=.03, p<.05$)、「自己観」と「幸福感」の交互作用項も有意であったため ($\beta=.45, p<.05$)、単純傾斜検定を行った。

具体的な手続きとしては、「幸福感」を調整変数とみなし、その値を平均 $\pm 1SD$ の2通りで固定した場合のストレスの効果を検討した(図3)。その結果、「幸福感」が相対的に低い場合(-1SD)においては、「自己観」と「子ども考察」に正の関係が確認され ($\beta=.35, p<.01$)、「幸福感」が相対的に高い場合(+1SD)においては「自己観」と「子ども考察」の関係が確認されなかった ($\beta=.01,$

$n.s.$)。よって、幸福感が相対的に低い母親は、自己観がネガティブなほど、子どもに関する考察を多く行うことが示された。

また、「自己観」を調整変数とみなし、その値を平均 $\pm 1SD$ の2通りで固定した場合のストレスの効果を検討した。その結果、「自己観」が相対的に低い場合(-1SD)においては、「幸福感」と「子ども考察」に正の関係が確認され ($\beta=.03, p<.001$)、「自己観」が相対的に高い場合(+1SD)においては「自己観」と「子ども考察」の関係が確認されなかった ($\beta=-.30, n.s.$)。よって、自己観が相対的に低い母親は、幸福感がポジティブな場合は、子どもに関する考察を多く行うことが示された(詳細:学会発表4)。

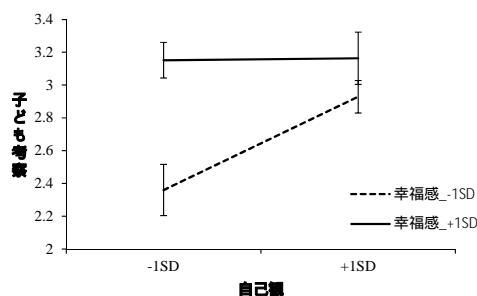


図3 自己観と幸福感の交互作用

(3) IWM と省察、幸福感が親としての成長(変化)に与える影響

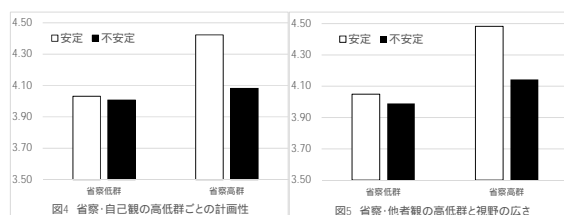
「省察」の様相を明らかにするため、省察尺度の下位因子得点を対象に、クラスター分析を行った(ward法, 2クラスター)。クラスターの様相を明らかにするためにクラスターの省察得点を比較したところ、全てでクラスター2の得点が有意に高かったことから、クラスター2を“省察高群”, クラスター1を“省察低群”と命名した。加えて、「IWM」の下位因子である「自己観」、「他者観」と「幸福感」の平均値を基に、高群低群に分類した。

続いて、「省察」、「IWM」、「幸福感」が母親の「自己意識」に与える影響を検討するため、「省察」、「幸福感」の高低群と、「IWM」の下位因子の高低群をそれぞれ独立変数とし、「自己意識」得点を従属変数とした3要因の分散分析を行った。

その結果、「計画性」において、「幸福感 ($F=11.76, p<.001$)」、「他者観 ($F=5.56, p<.05$)」、「自己観 ($F=4.36, p<.05$)」の主効果が認められ、「幸福感」が高く、「自己観」、「他者観」がポジティブなほど「計画性」が高いことが示された。「視野の広さ」において、「幸福感 ($F=6.40, p<.05$)」、「他者観 ($F=8.61, p<.01$)」、「省察 ($F=14.12, p<.001$)」において主効果が認められ、「幸福感」が高く、「他者観」がポジティブ、「省察」を多くするほど視野が広いことが示された。「心の広さ」において、「幸福感 ($F=23.37, p<.001$)」、「自己観 ($F=6.51, p<.05$)」の主効果が認められ、「幸福感」が高く、「自己観」がポジティブなほど他者に対して寛大なことが示された。

また、「計画性」において「省察」と「自

己観」の交互作用が確認されたため単純主効果の検討を行った($F=6.33, p<.05$)。その結果、「自己観」がポジティブな群において「省察」の主効果が、省察高群において「自己観」の主効果が認められ、自己観がポジティブ、「省察」をよくする母親は、計画性が高いことが示された(図4)。「視野の広さ」において「省察」と「他者観」の交互作用が確認されたため単純主効果の検討を行った($F=4.74, p<.05$)。その結果、「他者観」がポジティブな群において「省察」の主効果が、省察高群において「他者観」の主効果が認められ、「他者観」がポジティブ、「省察」をよくする母親は、視野が広いことが示された(図5)。



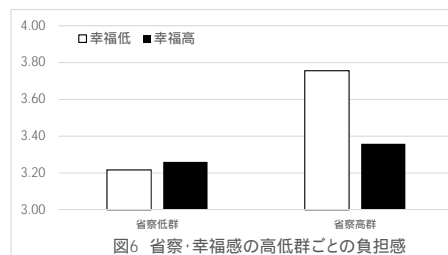
【研究】

まず、各尺度の分析を行った。具体的には、「省察」の様相を明らかにするため、省察尺度の下位因子得点を対象に、クラスター分析を行った(ward法、2クラスター)。続いて、クラスターの性質を明らかにするためにクラスターの省察得点を比較したところ、全ての因子でクラスター2の得点が高いことから、クラスター2を「省察高群」、クラスター1を「省察低群」と命名した。次に、「IWM」の下位因子である「自己観」「他者観」を対象に、クラスター分析(ward法、4クラスター)を行った。クラスターの性質を明らかにするためにIWMの下位因子得点を比較した。その結果を基に、「自己観」「他者観」ともにポジティブな群を「自律型」、自己観が高く他者観が低い、「軽視型」、自己観は低く他者観が高い「とらわれ型」、自己観他者観ともにネガティブな「無秩序型」と命名した。さらに、「幸福感」の平均値を基に、高群低群に分類した。

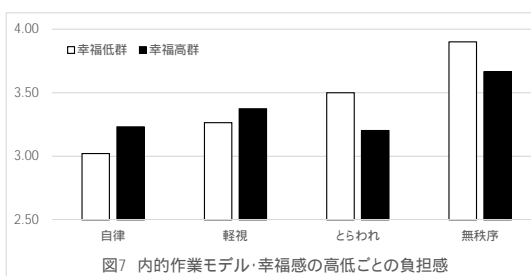
続いて、「省察」「IWM」「幸福感」が母親の「自己意識」に与える影響を検討するため、「省察」「IWM」のクラスターと「幸福感」の高低群を独立変数とし、「育児感情」得点を従属変数とした3要因の分散分析を行った。

その結果、「将来の見通し」を従属変数とした場合、「幸福感($F=23.20, p<.001$)」「省察($F=51.03, p<.001$)」の有意な主効果が認められた。加えて、「育児の充実」を従属変数とした場合も、「幸福感($F=21.60, p<.001$)」「省察($F=139.34, p<.001$)」の有意な主効果が認められ、「省察」や「幸福感」の高さが、育児のポジティブな感情を高めることが示された。「不安感」を従属変数とした場合、「IWM」の有意な主効果が認められた($F=6.27, p<.001$)。その後の多重比較の結果、「自

律型」と「とらわれ型」は、「軽視型」と「無秩序型」に比べ得点が低く、「不安感」が低いことが示され、「他者観」が不安感に関係していることが示唆された。さらに、「負担感」を従属変数とした場合、「省察」と「幸福感」の有意な交互作用が確認されたため($F=7.39, p<.01$)、単純主効果を検討した。結果、幸福感低群において「省察」の主効果が、省察高群において「幸福感」の主効果が認められ、幸福感が低く、多く省察をする母親は負担感が高いことが示された(図6)。



「IWM」と「幸福感」の有意な交互作用も確認されたため($F=2.64, p<.05$)、単純主効果の検討を行った(図7)。その結果、「とらわれ型」において「幸福感」の有意な主効果が認められ、「とらわれ型」の母親において「幸福感」が低い母親は、高い母親に比べ「育児の負担感」が高いことが示された。また、幸福感低群において、「無秩序型」の母親は、「自律型」、「軽視型」の母親よりも得点が高く、「負担感」を強く感じていること、「とらわれ型」の母親は、「自律型」の母親に比べ負担感を強く感じていたことが認められた。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

1. 加藤 孝士 (2017). 養育者のIWMと育児ストレスが養育態度に与える影響 安定したIWMは、適応的な養育を導くのか 小児保健研究第76(2), 査読有, 162-168.
2. 加藤 孝士 (2016). 青年期のIWMと日常生活スキルの関係 - 主観的幸福感を統制要因として - 応用教育心理学研究, 33号, 査読有, pp15 - 24.
3. 加藤 孝士・永井 知子・富田 喜代子・朴信永・寺園 さおり (2016). 母親になることによる意識の変化 母親の年齢, 子どもの数に注目して 保育文化研究, 2, 査読有, pp83-94.
4. 加藤 孝士・小川 佳代・富田 喜代子・中岡 泰子・永井 知子 (2016). 子育て支援のボランティア経験が学生の意識に及ぼす影

響 子どもへの関わりの経験と動機づけ、援助成果に注目して 保育文化研究, 3, 査読有, pp1-10

5. 永井 知子 (2016). 子育て支援領域における援助要請研究の概観と今後の課題 四国大学紀要人文・社会科学編第 46 号, 査読無, pp.69-80.

6. 加藤 孝土・永井 知子・小川 佳代・富田 喜代子・中岡 泰子 (2015). 子育て支援センターを利用する母親のリフレッシュと育児ストレスについて リフレッシュ行動と効果期待のどちらが育児ストレスを予測しうるのか 四国大学紀要人文・社会科学編, 45, 査読無, pp9 - 19.

7. 富田 喜代子・中岡 泰子・小川 佳代・前田 宏治・加藤 孝土 他 7 名 (2014). A 県における子育て支援ニーズに関する調査研究(その3) 保育士からみた子育て支援ニーズの変容について 四国大学紀要人文・社会科学編, 42, 査読無, pp83 - 93 .

〔学会発表〕(計 11 件)

1. 加藤 孝土 養育者の IWM に応じた効果的なサポートとは サポート提供者(配偶者・実母)に着目して 日本発達心理学会第 28 回大会 2017.3.25. 広島国際会議場.

2. 加藤 孝土 養育者の IWM が幸福感に与える影響 ソーシャル・サポートによる違いに着目して 日本教育心理学会第 58 回大会 2016.10.10. サポートホール高松.

3. Ogawa. K. & Yoshimura.N., Tomida. K., Nagai. T., Nakaoka. Y., Katoh. T. The effect of utilizing SNS to support childrearing. The 4th China Japan Korea Nursing Conference. 2016.9.27. China.

4. 加藤 孝土・富田 喜代子・永井 知子・朴 信永・寺園 さおり 子育てによる母親の自己意識の変化 出産前と子育て中の因子構造の違いに着目して 日本保育学会第 69 回大会 2016.5.13. 東京学芸大学.

5. 永井 知子 地域でできる子育て支援の可能性 子どもと離れたリフレッシュ活動は親のストレス解消に効果的か - 日本保育学会第 69 回大会. 2016.5.13. 東京学芸大学.

6. 加藤 孝土・朴 信永 母親の IWM が子育ての省察に与える影響 幸福感の高低に着目して 日本発達心理学会第 27 回大会 2016.4.30. 北海道大学.

7. 永井 知子 IWM が養育者の「素直になれなさ」に与える影響 大学生との比較を通して 日本心理学会第 79 回大会 2015.9.23. 名古屋国際会議場.

8. 永井 知子・加藤 孝土 養育者の「素直になれなさ」と育児不安, ソーシャル・サポートとの関係. 小児保健協会 第 62 回大会 2015. 6.20. 長崎大学.

9. 永井 知子・富田 喜代子・朴 信永・寺園 さおり・加藤 孝土 親育ちに影響を与える要因の検討(1) 親育ちの構成要因の検討 日本保育学会第 68 回大会 2015.5.9. 椋山

女学園大学.

10. 加藤 孝土・富田 喜代子・朴 信永・寺園 さおり・永井 知子 親育ちに影響を与える要因の検討(2) 属性に注目して 日本保育学会第 68 回大会 2015.5.9. 椋山女学園大学.

11. 加藤 孝土・永井 知子・朴 信永・寺園 さおり・富田 喜代子 母親からみた近年の「親育ち」とそれにかかわる要因の予備的研究 インタビュー, 及び自由記述の分析から 第 26 回日本発達心理学会 2015.3.21. 東京大学.

〔図書〕(計 5 件)

1. 加藤 孝土 ミネルヴァ書房. 「震災・放射能災害下の保育と保育者の意識」「震災・放射能災害下の家庭生活と保護者の意識」関口 はつ江(編) 東日本大震災・放射能災害下の保育 福島の実から保育の原点を考える (2017). pp193-238.

2. 加藤 孝土 建帛社. 「保育における相談支援」 太田 光洋(編) 教育・保育相談支援 (2016) pp52-66.

3. 加藤 孝土 保育出版会. 「子どもの発達と学習のプロセス」 太田 光洋(編) 子どもが育つ環境と保育の指導法 (2016) pp15-32.

4. 加藤 孝土 ナカニシヤ出版. 「性格の発達」 浜崎 隆司・田村 隆宏・湯地 宏樹(編) やさしく学ぶ保育の心理学 (2016) pp64-73.

5. 永井 知子 ミネルヴァ書房. トピックス「保育・子育て支援」 藤田 哲也(監修) 串崎真志(編) 絶対役立つ臨床心理学 カウンセラーを目指さないあなたにも (2016) pp79- 80.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 孝土 (KATOH, Takashi)
四国大学・生活科学部・講師
研究者番号: 10631723

(2) 研究分担者

永井 知子 (NAGAI, Tomoko)
四国大学短期大学部・講師
研究者番号: 30612056

朴 信永 (PARK, Shin-young)
椋山女学園大学・教育学部・准教授
研究者番号: 50462057

富田 喜代子 (TOMIDA, Kiyoko)
四国大学・生活科学部・准教授
研究者番号: 70441582

寺園 さおり (TERAZONO, Saori)
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号: 90457937